

## 分場拾遺X 下田と土佐かつお一本釣り

下田は土佐のかつお一本釣り船団にとっての根拠地でした。このことは、下田の郷土誌にも歴史書にもどこにも記されていません。

**土佐かつ通りを知っているか** はじまりは何年前だったのでしょうか？隣県の水産試験場OBのIさんから、次のような問い合わせが来ました。「下田の町中に土佐かつ通りというのがあるそうだが、知っているか？」私は知らなかったので、元下田市漁協組合長の佐々木源也さんに聞きましたが、佐々木さんも知りませんでした。

ひょっとしてと思い、ネットで「土佐かつ通り」と検索すると文献が1編ヒットしました。それは、野地恒有氏が平成10（1998）年に報告した「伊豆半島下田港のカツオ釣漁とトサカツ衆」でした。この論文は土佐のかつお一本釣り船団（以下、土佐かつ船団と呼びます）の下田への出漁と移住の歴史を明らかにしたものでした。

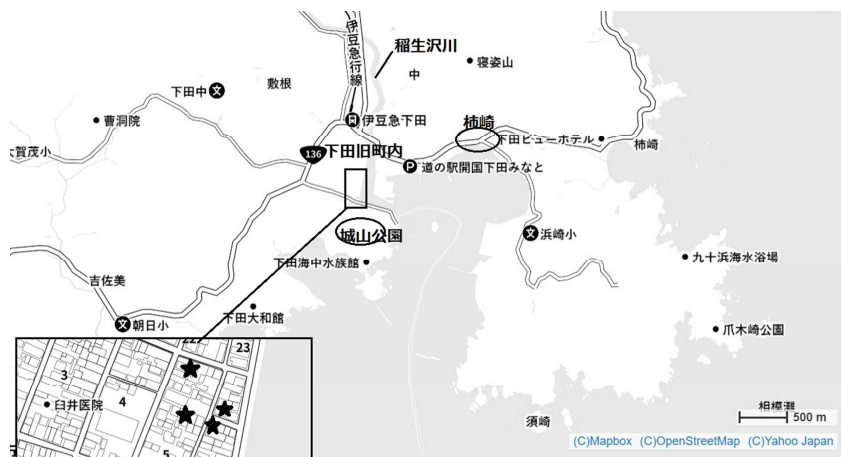


図1 下田旧町内の“土佐町”の場所  
野地論文 表2から作成、左の図のマークが土佐かつ船団と船宿関係の位置を示し、このあたりが“土佐町”と呼ばれていた一帯である。

その内容は「高知県のかつお一本釣り漁船は昭和初期に伊豆海域に出漁するようになり、昭和8(1933)年に下田に土佐出漁船組合が結成され、昭和30年代になると伊豆沖、三陸沖への出漁が増えてきて下田が根拠地として大きな意味を持つようになった。昭和37(1962)年に結成された土佐鯉漁業協同組合は主事務所を下田に置いていた。」というものでした。図1は野地論文に載っている土佐かつ船団と船宿関係の位置を示したのですが、集中している下田の河岸通り周辺が土佐町と呼ばれる程だったと記されていました。Iさんの問いの答えはここでした。

野地論文には土佐かつ船団の船名として明神丸、源漁丸、廣漁丸、文盛丸、一丸、広栄丸などが、そして戦前の昭和期に6隻、戦後にさらに9隻が下田を根拠地としたことが記されていましたが、それ以上調べるような動機付けはありませんでした。

**柿崎のいわし籠との出会い** 転機が訪れたのは、柿崎のいわし籠が出現してからでした。いわし籠についてわかったことを伊豆分場だより366号に掲載してあります。「下田市柿崎に地曳網が6か統あって、地曳網はカツオの一本釣り漁船に餌いわしを供給するものだった。」というのが、その概要です。そして、伊豆分場だよりには書きませんが、柿崎の地曳網が供給していた一本釣り漁船は土佐かつ船団だったのです。これは柿崎の地曳網が供給していた船名を野地論文とてらし合わせることで分かりました(表1)。

また、野地論文には土佐かつ船団を世話するのは“いさば”という船宿であり、いさばの役割の一つとして餌の確保があることが記されていました。戦前に下田に進出した土佐かつ船団は6隻、鯉船に餌いわしを供給していた柿崎の地曳網も6か

統と数が一致し、いさばが仲介となり、土佐かつ船団と柿崎の地曳網を結び付けたと考えられます(表1)。

昭和46(1971)年に刊行された「静岡県観光漁業」に記述があるように地曳網は江戸時代の村張りを引きずった前近代的な漁業と思ってきましたが、柿崎にあった地曳網はそうではなく、鯉漁業を

表1 柿崎地曳網といさば、土佐かつ船団の関係

植田一二三氏に聞き取り*			野地論文表3から作成	
柿崎の地曳網	餌を渡していた鯉船	関係	船宿(いさば)	戦前に下田に進出したトサカツ衆
高浜(たかんば)	?	?	ヤマツル	明神丸
浜浦	?	?	ヤマツル	源漁丸
七兵衛屋	?	?	ミウラヤ	一丸
呑三	廣漁丸	=	ヤマツル	廣漁丸
つるや	文盛丸	=	ミウラヤ	文盛丸
忠右衛門	?	?	?	広栄丸

地曳網との対応が不明な鯉船として一丸、源漁丸を覚えている。

\*: 聞き取り日2021年2月18日  
2021年8月20日

支えた重要なパーツだった可能性があります。その実証—土佐鯉漁船団にとって、餌いわしの供給で柿崎地曳網が重要だったとの資料を探すことが次の目標になりました。

まず、柿崎の地曳網に関する記録を探してみました。明治25(1892)年の静岡の漁業を記録した静岡縣水産誌には柿崎の地曳網は10張となっており、明治15(1882)年に植田七平氏がそれまでの村民共有の地曳網を改良し好結果を得たため、たちまち10張に増えたと記述されていました。これに従うと、柿崎では明治15(1882)年に村張りから脱却し、企業的経営に踏み出したことになり、地曳網が盛んな地区であったことが分かります。

青野寿郎氏は昭和5(1930)年から10(1935)年に伊豆半島の漁村地理学的研究を展開し、伊豆半島の地曳網について次のようにまとめています。伊豆半島沿岸は海底地形上の制約(岩礁が多く、砂浜は狭小、急深)から、地曳網は規模が小さく大きな勢力ではないこと、しかし、下田湾における柿崎の地曳網は餌イワシ供給のため、利用度が高いとしています。また、昭和5(1930)年から昭和9(1934)年の

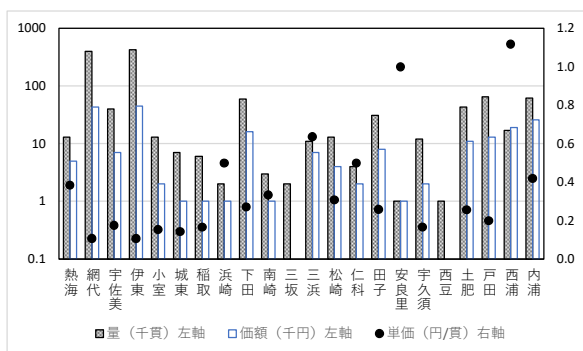


図2 昭和5(1930)年から昭和9(1934)年の伊豆半島の町村別のイワシ類の平均漁獲量と平均金額、単価  
青野寿郎(1935)から作成

町村別のイワシ類の統計数値を示しており、それを図2に示しました。この当時、イワシ類の主な生産地は網代、伊東、下田、戸田、内浦で、特に網代、伊東が400千貫を越えており、各段に多い状況でした。柿崎が所属する浜崎村の漁獲量は1千貫、金額は1千円と多く

はありませんが、単価を計算すると4位に位置していました。単価が高かったのはカツオ船に餌イワシとして販売していたためではないでしょうか？

朝野洋氏は東京教育大学地理学研究室の研究テーマ「南伊豆における沿岸集落の生態」を分担した成果として、下田市須崎地区についてまとめています。そのなかで、柿崎の地曳網は昭和29(1954)年に6か統あり、合計58人の労働者を雇用していたこと、昭和38(1963)年には見られなくなっており、廃止の一因として労働力不足を推測しています。しかし、野地論文には、昭和30年代になると下田に土佐かつ船団は入港しなくなり、下田は漁船が入港する根拠地ではなく、漁船の入港

先を指示する指令基地として意味合いが強くなったと記されており、柿崎の地曳網が衰退した要因は労働力不足よりも、餌いわしの需要減少の側面が大きいのかもかもしれません。

青野論文で、柿崎地曳網によるカツオ船への餌イワシ供給の重要性はわかりましたが、柿崎地曳網と土佐かつ船団のつながりを示す資料は、残念ながら、下田では得ることはできませんでした。

「黒潮を追って」を追って 野地論文には参考文献として、土佐鰹漁業協同組合の本、「黒潮を追って」が載っていますが、この本は静岡県内のどこの図書館にも所蔵されていませんでした。土佐かつ船団の母体—土佐鰹漁業協同組合が著者？編者？になっているこの本はいくつかの参考になることが書かれているのではないかと、どうしても読みたくなりました。高知出張に併せて、高知県立図書館と高知市立図書館が合体して新築された「オーテピア」を訪れたのは、昨年（2021年）10月のことでした。

「黒潮を追って」は土佐鰹漁業協同組合設立15周年を記念して発行されたものでした。そこには土佐かつ船団にとって下田、伊豆の重要性がわかる記述が数多く載っていました。とにかく、びっくりしたのは口絵写真でした。この種の記念誌の最初を飾る写真は神社に奉納された昔の操業風景、組共建物、漁船、今の操業風景と相場が決まっています。確かに1枚目の口絵写真は神社に奉納された絵馬に描かれた昔の操業風景でしたが、2枚目はなんと下田の城山公園から漁船が折り重なって停泊している稲生沢川河口を撮影したカラー写真が見開きで掲載されており、土佐カツオ船団の根拠地：伊豆下田港として紹介されていました。思わぬところで見慣れた風景が飛び込んできて、呆然としてしまいました。自らの漁船の出身港は下田港の写真の下に小さく置かれており、下田港を大きく取り上げていたことは、土佐かつ船団にとっていかに下田が重要かを示したものと言えるでしょう。

「黒潮を追って」には、土佐かつ船団が下田を根拠地にした理由、下田での生活、暗号通信のこと、土佐久礼船団の伊東事務所、益漁丸の遭難と下流の人々のたいまつ、土佐鰹漁協への解散命令と高知県吏員の下田への訪問、高知県信漁連職員による返済のための下田出張、下田“土佐町”にあった土佐出漁船員厚生福祉会館などが描写されていました。

そして、最後の記述は土佐鰹漁協内の暗号通信で大きな役割を果たした伊東漁業無線局でした。伊東漁業無線局の記録はどこにも残っていないと思っていましたが、まさかこんなところにあるとは。既にない無線局建物の写真とともに歴史、建物の大きさ、無線設備、施設の施工業者まで記載されていました。

図書館「オーテピア」には、そのほかに、土佐久礼町発行の「土佐のカツオ漁業

史、「高知県漁業発達史」、高知県発行の「近海かつお漁業の実態と振興対策」が所蔵されていましたが、土佐鯉漁業協同組合に関する記述は「黒潮を追って」と大同小異でした。残念ながら、高知にも柿崎地曳網と土佐かつ船団のつながりを示す資料はありませんでした。

そのような資料の存在を知っておられる方はいないでしょうか？

**人として卒業しちゃったよ** 最後に、伊東漁業無線局職員であった菊地隆雄さん（現静岡県定置漁業協会）に話を聞いてみました。

- ・土佐かつ船団のこと：土佐久礼の事務所が伊東渚町にあった。観光会館の交差点から東海自動車方面に100m行ったあたり、今空き地になっている。昭和52（1975）年にはあったことを覚えている。平成6（1994）年の後、数年間は残っていた。漁業無線は伊東無線局が閉鎖された後は室戸・土佐清水無線局を利用していた。伊東に事務所を構えた訳は、餌場の宇佐美や網代があったため。事務所で餌の番待ちをしていた。下田には奈半利、焼津には土佐佐賀が事務所を構えた。
- ・土佐かつ船団は最盛期には100隻はいた。伊東無線局を利用していた。1日3回から5回、船と交信して暗号を解読して船主に電話連絡した。ほとんどの船主が受信機を持っていた。暗号作成を手伝ったこともある。
- ・土佐かつ船団以外のカツオ船は通称第2グループと呼んでいた。土佐かつに入れない高知県船やいろいろな県の船が所属。無線局には他に西伊豆のサンマ船、イカ船、旋網、太平洋マグロ船などが所属していた。
- ・自分は昭和42（1967）年に無線局に就職した。昭和48（1973）年に新井にあった無線局は都市雑音がひどくなったので、山頂に移転した。
- ・伊東漁業無線局は平成6（1994）年12月31日に閉鎖した。最後の当直は自分だったので、忘れない。無線局の職員は自分とJちゃん以外の人は人として卒業してしまった。

**補遺** 土佐かつ船団一下田となると、下田市前市長 福井祐輔氏を忘れるわけにはいきません。福井氏は、親がカツオ船主（船名福井幸漁丸）で中学3年の時に土佐清水市から下田市に移住、下田北高、防衛大を卒業した後、陸上自衛隊、カンボジアPKO隊長、防衛大教授を歴任した後、下田市民の要請で下田市長選に出馬、当選された方です。市長を退くとともに、下田からも離れており、土佐かつ船団に関する話を聞けなかったことは残念です。

福井さんのように現在も下田に縁があり、居住している土佐かつ船団の子孫の方は何人かいるそうです。

**謝辞** 稿を終えるにあたり、聞き取りに応じて頂いた植田一二三さん、菊地隆雄さん、川崎信昭さんに感謝の意を表します。ありがとうございました。

## 文献

- ・野地恒有（1998）伊豆半島下田港のカツオ釣漁とトサカツ衆—出漁漁民の移住と在来村落の関係—、愛知教育大学研究報告、47（人文・社会科学編）、53～63.
- ・長谷川雅俊（2021）柿崎のいわし籠、伊豆分場だより、366、12～15.
- ・関東農政局静岡統計情報事務所編集（1971）静岡県の観光漁業 昭和45年度、静岡農林統計協会、112p.
- ・高橋與策（1894）静岡縣水産誌 全 復刻版 第三卷、静岡県図書館協会、203丁.
- ・青野寿郎（1937）伊豆半島に於ける漁村の地理学的研究 第二報 免許漁業に就て（其一）、地学雑誌、49（4）、177-192.
- ・青野寿郎（1935）伊豆半島に於ける漁村の地理学的研究 第一報 沖合並びに遠洋漁船の根拠地に就て（其二）、地学雑誌、47（10）、487-497.
- ・朝野洋一（1977）下田市須崎の社会経済の変遷にみる沿岸集落の生態、茨城大学教養学部紀要、(9)、29～56.
- ・土佐鰹漁業協同組合（1978）黒潮を追って.
- ・<https://ja.wikipedia.org/wiki/福井祐輔>

（長谷川雅俊）